

京師帝國大學經濟學會 經濟論叢

第四號 第十四卷

昭和三年四月一日發行

論叢

ソロキンの文化的變動形式論……………文學博士 米田庄太郎
 貨幣の本質とその價值……………商學士 中山伊知郎
 貨幣の本質について……………文學博士 高田保馬
 共同體思想の國民的性格……………經濟學博士 石川興二

時論

稅制整理と増稅……………經濟學博士 汐見三郎

研究

職分と職業……………經濟學士 澤崎堅造
 貿易理論の前提……………經濟學士 松井清
 ダンピングの理論……………經濟學士 岡倉伯士
 近世絞油業の發達……………經濟學士 住谷勇二

說苑

明治初期の國內市場……………經濟學士 堀江保藏
 産業構造の研究と政策……………經濟學士 田杉競

附錄

雜報：外國雜誌論題

（禁轉載）

共同體思想の國民的性格 (下)

石川 興 二

四

實踐論は、人間觀並に歴史觀の上に基礎付けられるものであるが、以上せし共同體的人間觀並に歴史觀の上に、クロポトキンの共同體的變革論が打ち立てられてゐる。従つてその共同體史觀の國民的性格として見られたところの共同體思想の限界は、その共同體的變革論に於ても同様に見られるのである。

彼は、その歴史觀に於て、十六世紀より十八世紀に至る國家主義時代について、次の如くに述べて居る。國家の專制的權力が在來の共同體を破壊し、人々は、國家に對する義務を増して行くにつれ、人民同士の間の義務を免れて行つた。かくて、十七世紀より最近の三世紀に互り放從な偏狹な個人主義が發達し、個人主義社會が發展した。この個人主義社會の發達するにつれて、これまで共同體に歸屬して居た生産手段は、次第に小數者の獨占に歸し、更に小數者に於ける富の増大を増進し、かくてこの個人主義社會は必然に有産者と無産者との二つの階級に分割されて行つた。これが即ち現代の資本主義社會であつて、クロポトキンは今やこの資本主義社會に當面して、これを變革せんとするのである。故に彼の變革論は、この社會の批判を以て始まる。而して『相互扶助論』に於て論明されたところの彼の根本思想即ち Mutual Aid 相互扶助は種を發展せしめ Mutual Struggle 相

互闘争は種を衰亡させると云ふことがその根底をなして居る。

現代社會に於ては、社會は富んで居るに拘らず、大多數の人々が貧困状態に於てある。それはこれまで幾多の人々の相互扶助の結果に成つたところの生産並に生活の必要なるものが社會の少數者によつて獨占されて居るからである。かくてまた、教育なるものもまた少數者に獨占せられ、大多數の者は必要なる教育を受けることが出来ない。「かくて社會は二つの敵對的な陣營に分裂されて居る。」¹⁾かくの如き社會制度はまたそれ自身、社會的感情の發達を阻害する。「正義、自己尊重同情並に相互扶助なくしては、強奪によつて生活せる動物の數種或は奴隸を保持する蟻が亡びたるが如く、人類も亡びざるを得ないことを我々は知つて居る。」²⁾かくて獨占の本源的行為より來る諸結果は、社會生活全體に擴がる。死の制裁の下に、人類社會は最初の原理に歸るべく強ひられる。³⁾かくて彼はこゝに、現代の個人主義社會をその共同體史觀の根本の立場に立つて批判して居る。即ち人間は本來共同體に於て發展し來つたのであるがこの共同體が國家權力によつて破壊されかくて齎らされた今日の個人主義社會に於ては、人々が相對する階級に分裂して闘争して居るのであつて、このまゝにては滅亡させるを得ない。この滅亡を免れんとすれば、本來の共同體の原理に返へらなければならぬのである。

共同體に於ては、氏族共同體に於ても、また村落共同體に於てもその共同體の「總ての爲めの幸福」Well-Being for All」と云ふことが、その究極目的となつて相互扶助が行はれたのである。而も今や「この總ての爲めの幸福は夢ではない。」⁴⁾それは實現さるべき理想となつた。即ち「我々の祖先が、我々の生産力を増大する爲めにした總てのお蔭で、このことが可能であり實現し得るのである。」⁵⁾

1) The Conquest of Bread. London. 1906. p. 13.

2) Ibid. p. 14.

3) Ibid. p. 16.

6)

かくて彼が、個人主義社會變革の究極目的として居るところのものは、本來の共同體の根本原理としての「總ての成員の福祉」である。このことは總ての共同體的變革思想に於て見られるところであつてアリストテレスもその理想國家に於ては「國家の成員の一部分に關してははなく、全部に關して幸福と云はるべきである。」¹⁾として居る。またルソオの共同體に於ても、その成員の總てが幸福であることが究極目的とされて居る。

然らば、この究極目的の爲めに、彼がそれを實現せんとするところの理想社會の形相は如何なるものであるか。彼は理想社會なるものは「社會が既にそれに向つて進みつゝあるところの状態」である、と考へたのであるが、この現代の個人主義社會に於て「相互鬭爭」の事實の傍に發展しつゝある相互扶助の事實を見るのである。即ち專制的國家の權力的支配も個人社會の發展も、人間の感情と理智とに深く根ざしあらゆる進化によつて打ち固められて來た人類共同の感情を破壊することは出来なかつたのであつて、この共同感情に基いて新なる相互扶助の形式が發展しつゝある。その本質は自由なる個人の *Free Agreement* 「自由合意」と云ふことであつて、それは總ての種類の自由團結の著しい發展 *the prodigious development of free groups of all kind* である。「この事實は、十九世紀の後半の本質である程に、多數であり通常的である。……自由にして無限に變様される此等の組織は、我々の文明の極めて自然な成果である。それ等は極めて速に擴まり且つ互に極めて容易に團結する。」かくて彼は、この自由團結の運動の可能を諸種の文化域について見て居るのであるが、その特に優れた例として、海難救濟組合の運動、赤十字社の運動、鐵道のヨーロッパ中史支配等について述べて居る。「その仕事は、全く、諸委員會並に地方的團體に組織されて居る者によつて行はれて居る。即ち相互扶助と相互合意とによつて *by mutual aid and*

1) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第二一〇頁參照

agreement 行はれて居るのである。」かく「人間は彼等の利益が絶對的に矛盾するのではない限り、一致して調和的に行動し、極めて複雑な性質の集会的な仕事を完成するものである。」「然し奪略と偏狭とそれ故に愚なる個人主義に基礎付けられて居る現代社會に於ては、この種類の事實が必然的に少いことは明である。合意は常に必ずしも完全に自由ではない。而して屢々、憎惡すべきでないにしろ賤しい目的をもつて居る。」¹⁾ことも認めて居る。

また特に經濟に關するものについて曰く、「異なつた産業を國際的に組織する傾向に向ひ且つ勞働條件改善のための機關たるに止まらず機會さへあれば生産の管理を掌中に收めようとする組織になりつゝある勞働組合主義、工業並に農業に於て、生産の爲め並に消費の爲めの協同組合運動、及び兩種の協同組合運動を實驗的諸植民地に於て結合せんとする諸試み、最後に所謂都市社會主義なる極めて多様な領域——此等がそれに於て創造力の最大量が近時發展したところの三方向である。」²⁾

こゝに彼は近世の個人主義的經濟社會の中に興つて來た組合主義的發展を見て居るのであるが而も彼の市民社會論は單なる組合主義の立場に止まるものではない。彼がこれ等の運動に見た本質は free Agreement 「自由合意」と云ふこと又は國家權力と何等關係のない自由な相互扶助の事實であつた。かゝる立場に於て彼は現代社會を變革すべき主體としての Commune 地方自治體を考へた。この自治體が立つて大衆の生活に必要な食物・衣類・住宅並に生産手段を Communalization 地方自治體化することを考へたのである。彼は佛蘭西に例とり曰く「若しも五つか六つかの佛蘭西の大都會が the Commune 地方自治體たることを宣言するならば、他のものはその例に従ふであらう。而して多くの小都會が同じことをするであらう。同様に種々なる鑛業地區並に産業中心が：自

1) C. of B. p. 181.

2) Ibid. Preface.

らを自由團體に形成するであろう。」多くの田舎の場所も、遂に土地の耕作に投ずるであらうと述べて居る。こゝに個人主義社會の必然的結果としての協同組合主義によつて農村共同體並に都市共同體が復活されることとなる。扱て此等協同組合主義的な自治體は、かくの如く變革の動力、因となるのみならず、更に進んで、來るべき社會の構成單位となるのである。而してこれ等の自治體は嘗ての農村共同體並に都市共同體に於けるが如く、總ての成員の福祉を目的とするものなるが故にその住民に生活必需品を保證すべきであつて、この爲めには「その生産に絶對必要なものを所持しなければならない。即ち土地、機械、工場、運輸手段等が即ちそれである。」かくて各々の自治體は「總ての人の社福の爲めに必要な財の最大量を、人間のエネルギー消費の最小可能量を以て生産することを目的とし得るのである。」と考へられた。

而も後に詳にするが如く、彼は市民社會の分業尊重に反對して、勞働の合成を各人についても各自治體についても主張するのであつて、各々の自治體は「自然富源の一定の多様性を處理するに十分である大きさの個人の各集團が、それ自身の農業的並に工業的生産の大部分を生産し自らに消費する」ものであると考へる。

かくてこの地方自治體は、變革の初めに當つては、都市共同體としてまたは農村共同體として發足するも、前者は農業を取入れることにより後者は工業を取入れることによつて自給的となり、次第に都市共同體と農村共同體との差別をなくするのである。かくの如き自治體、—その内に於て各人が勞働の合成に於てあるところの—が人類社會を構成するところの單位であつて、その自由聯合が人類社會を構成するのである。この自治體の組合的協同的な性質は彼が自治體の生産生活について述べて居る次の語によつて一層明にされて居る。曰く「その成員

の各々が次の如き約定を履行すべきことを契約するところの一つの團結を例にとつて見よう。即ち汝が二十歳より四十五歳又は五十歳に至るまで、日々四時間又は五時間を生存に必要であると認められたる或仕事に捧げると云ふ條件に於て、我々は汝に我々の家、倉、道路、運輸手段、學校、博物館等の使用を與へる。必要品を生産せんと企てるならば、汝が加はらんと欲する生産團體を選べ。又は新な團體を組織せよ。而して、汝の時間の残については、汝の趣味に従つて休養、藝術、又は科學の爲めに汝の欲する人々と結合せよ」と述べて居る。この自治體に於ては生産的勞働がかくの如き全く自由選擇にまかされてあり。各人はその自治體に於て生きんとする限り、一日の一定時間必ずその自治體の生活必要品の生産に従事しなければならないのである。かくて今日の個人主義社會に於て見られる如き勞働の嫌惡即ち *indolence* なるものはないと考へられた。

以上がクロポトキンの變革論の骨子であるが、それは根本に於て共同體的立場に立つて居る。即ち一言して云へば、本來の共同體の根本原理である「總ての成員の福祉」の爲めに、嘗ての村落的並に都市的共同體を、個人主義社會の必然的結果たる協同主義の原理によつて回復せんとするのである。この協同組合主義が、個人主義社會の必然的なる結果である所以は、この個人主義社會の經濟生活の本質が *economic freedom* 經濟的自由であつてこの同一の原理がそのはじめには *free competition* 自由競争として、後には *free co-operation* 自由協同として働らくからである。ヘーゲルは「市民社會」より彼の理想社會としての「國家」への過度點に於て、*Korporation* を考へて居るのであるが、クロポトキンはこの協同によつて個人主義社會より嘗ての共同體を回復せんとするのである。而も彼の共同體的體驗は農村共同體並に都市共同體に限界され國民共同體の體驗を缺如して居たが故に、その史

1) Ibid p. 205

2) Hegel, Rechtsphilosophie., § 230-256

觀に於て共同體的立場を徹底し得なかつたと同様に、その變革論に於ても亦、共同體的立場を徹底し得なかつた。即ち曩に明にされたる共同體の發展法則¹⁾に於て見らるゝが如く、共同體なるものは小なるものより大なるものへと發展して行くのであるが、而も小なるものは大なるものゝ中に舉揚せられてはじめて自己を共同體として保持しまた完成し得るのである。故に農村共同體又は都市共同體が自己を共同體として保持し完成すると云ふことはこれ等の共同體をその中に含むところのより大なる共同體としての國民共同體に於てはじめて可能である。然るに彼に於ては國民共同體なるものが考へられて居ない。故に今や協同主義の原理により回復された自治體は、その中に自己を保持しその組合主義的性質を本來の共同體的性質に高める爲めに必要な共同體的地盤を缺くことゝなるのである。かくて第一に彼の自治共同體の概念は、本來の共同體であるところの自然と文化を共同にし共同感情によつて結ばれて居る人間の存在とは異なり全く自由合意 free agreement の上に基礎付けられたる協同的なものに止るのである。従つて相互扶助についても、彼はこの自由合意によるものと嘗ての共同體に於けるものとを一樣に考へて居るのであるが、前者は個人主義社會に於て自由となつた個人の合意に基くものであつてそれは自然と文化とを共同體にしそれ故に共同感情に結ばれて居るところの本來の共同體に於ける人々の間に於ける相互扶助とは本質を異にしその相互扶助の確固たる地盤を缺如して居る。こゝに相互扶助なるものも社會化されそれは共同ではなくして自由協同 free co-operation たるにすぎない。第二にこれ等自治體は、その根底となるべき國民共同體なくしては、今日事實上存立し得ない。即ちその自治體相互の關係は、單に自由聯合たるに止まり得るものではなく、共同體にまで進まなければならぬのである。小共同體がそれ自身として存立したる古代社

1) 本誌本年三月號拙稿參照

會に今日を反へすことは出来ないものであつて、この地盤たる共同體を缺如する場合には、中世の農村共同體に於けが如く、これ等自治體は國家權力の下に強壓的に統一されて居るより外ないのである。こゝに我々は今日コルホースの形に於て村落共同體を回復しまた諸工業共同體をその國民的構成の單位とせるソヴェット聯邦に於ける國家專制主義の必然性を見るのである。

かく「自由合意」又は自由契約を本質とする點に於て、ルソオに近似するが彼は財産制度に於ては前者は私有制度を原則とするに對し後者は共有制度を原理とする。即ち生活必需品並に生産手段の自治體化によりて市民社會を變革しこれを以て新たな共同體の根本條件として居ることであるが、こゝにクロボトキンに於ける共同體主義より、共產主義への轉化が見られる。即ち共同體なるものゝ根本原理は、クロボトキン自身本來の共同體について明せし如く、共同感情又は共同愛である。財産制度はこの目的を達する爲め的手段たるに過ぎない。財産なるものが人生の爲めに眞に必要なのはその用の爲めである。故に共同體的立場に於て第一に重んずべきは共用であつて共有ではない。然るに共產主義は、財産制度を人間的存在の根本原理となし且つ共有を原則と考へるのである。この點に於てクロボトキンはむしろマルクスに近くのである。即ち經濟社會を以て人間的存在の「眞實の地盤」となし財産制度を以てその法的表現とするマルクスは、¹⁾ 原始共同體についても、その共同精神又は共同感情よりもむしろ共產制度を根本條件と見て、これを原始共產體と呼ぶのであるが、市民社會の變革についても生産手段の共有をその根本原理としてこれを爲さんとするのである。而も嘗て述べたるが如く²⁾ かく私有を共有に變革せんとするこのことは、むしろ共同感情を破壊し共同精神を根本原理として重んずる共同體的立場と全く矛盾する。而

1) Zur Kritik der politischen Ökonomie. Vorwort.

2) 拙稿、『革新原理としての民有國に就いて』。本誌第四十三卷第二號參照

もこのことがむしろ市民社會の私有財産制度に把らはれて居るのであつて、市民社會の弊を解決する道はその私有制度と正に相反する共有制度に於てのみあると考へるが故である。¹⁾この點に於て共同體主義の共產主義化は共同體主義の市民社會化又は唯物化であると云ふことが出来る。

クロボトキンの理想社會に於ける共同體は地方的範圍に止まつたが、この地方共同體の自由聯合としての理想社會の範圍は、ルオソの理想社會の概念が國民範圍に止まりたると異なり世界的範圍に及んで居る。この兩者に於ける理想社會の範圍の相異については、その根底をなすところの十八世紀の生の事情と十九世紀の生の事情との相違が一應考へられなければならない。即ち十八世紀に於ては國民國家が内に對しまた外に對して諸種の對立を有し人類の體驗は一國民國家内に限定されたが故に當時の國權的立場たる重商主義に於てのみならず、當時の社會的立場たる重農主義に於ても一國民國家範圍の考察に止つたのである。當時の共同體的立場たるルオソの思想にとつても同様の限界が有つたのである。然るに十九世紀に於ては市民社會が發達し諸交通技術が急激に發展し、かくて人類社會の連帶性が著しく進み來つたのである。故にこの世界的な生の地盤に於て成立した十九世紀の思想は、十八世紀のそれと異なり世界的範圍の考察となつた。例へばヘーゲルの國權主義思想も重商主義のそれと異なり、國家相互の存亡の交代により世界全體の發展を考へる立場に立ち、マルクスの社會主義思想も重農主義の社會主義と異なり、萬國の勞働者が團結する世界社會を求めた。かくてクロボトキンの共同體主義思想にあつても、ルオソの如き一國範圍に止まらず共同體の聯合として世界範圍にまで及んで居るのである。

五

1) 前掲、拙稿、參照。
2) 拙稿、『ヘーゲル史觀の實踐的構造』。本誌第三十六卷第四號第五號參照

クロポトキンは、その共同體の立場に立つて、マルクス主義並に正統學派を批判し、新な經濟學の道を開かんとした。これ共同體經濟學への試みとして注意されるべきである。

彼は共同體の根本原理であるところの「全成員の福祉」を究極目的として經濟學を打立てんとしたが故にこの經濟學は次の如くに定義された *The study of the needs of humanity, and the needs of satisfying them with the least possible waste of human energy.* 「人類の諸必要の並に人類のエネルギーの最小可能の消耗を以てそれ等を充足することの研究」而してかゝる經濟學の社會科學に於ける地位を、生物の必要とその充足の最も有利なる方法の研究であるところの動物生理學に相應する「社會の生理學」であるとして居る。かゝる立場より彼が消費論を重んじこれを以て經濟學の研究を出發點としたことは當然である。而して彼が人類の必要 *needs* として居るところのものは、單に生存の必要なるのみならず、人間の能力の發揚が必要とする一切である。従つてこれ等の必要を充足するところのものは、單に生活の必需品 *necessities of life* なるのみならず、更に廣く、生活の便宜品 *conveniences of life* を含むのである。

次に「人類の必要を充足する手段」が問題となるのであるが、彼は「總ての政治經濟學の本質的土臺の研究」は、「人間のエネルギーの最小の勞費を以て有用なる生産物の最大分量を社會に與へる爲めに最も適當せる諸條件の研究」であるとして居る。これは彼が近代社會科學一般の根本課題であるとするところの「どの社會形態が、斯くの社會に於て又は人類全般に於て、幸福の最大量従つて又生活力の最大量を最もよく保證するか？」どの社會形態が、此幸福の總計を質的にも量的にも増進發展せしむるにふさはしいか—即ち此幸福をもつと完全にもつ

と多様なものとなし得るであろうか」と云ふことの經濟學的規定である。故にそこに「最も適當なる諸條件」と云へるところのものは、安定期の經濟學に於けるが如く、一定の社會形態の下に於ける諸條件のみを意味するのではなく、むしろ如何なる社會形態が最も適當なものであるかと云ふ變革期經濟學の根本問題である。而して彼はこの最も適當なる社會形態として、前述せしところの自治體並にその自由聯合を考へたのである。然らば次には、何故この自治體を最も適當なる社會形態と考へたか、またそこに於ける經濟生活ことに生産生活を如何なるものとして考へたか、次にこれについて見よう。

彼は先づ勞賃制に反對し、自治體に於ける勞働の優秀性について次の如くに述べて居る。「福祉即ち身的、藝術的、並に道德的要求の充足は常に、仕事に對する最も有力な刺戟であつた。而して被傭者が僅に必需品を困難を以て生産する時、彼の努力に比例して彼の爲めにまた他人の爲めに安易並に贅澤が増加することを見るとこの自由な働き手は、遙に多くのエネルギー並に理智を無限に費ひやし、第一級の生産物を遙かに大なる豊富さに於て賣らす。∴故に總ての人の福祉を且つ總ての人の總ての表現に於ける生の享受の可能性を目的とする社會は、これまで奴隸、農奴、勞働制の下に於て作業が生産したよりも、無限に秀て居り且つ遙に多くを與へるところの自由作業を供給する。こゝに於ては筋肉的な仕事と精神的な仕事との分離が廢棄されて、仕事なるものは、人間の總ての能力の自由なる發揮となる。」「勞賃制の下に於けるエネルギー浪費の科學に與へられたる政治經濟學なる語は、悲しむべき皮肉である。」と述べて居る。

この自治體に於ける勞働の構成については次の如くに述べて居る。「今假りに農業並に多様な工業に従事して

居り、數百萬の人口を有する一社會を考へて見よう。…女を除いて總ての青年が、二十又は二十二より四十五又は五十に至るまで日に五時間を働くとする。而して必要と考へられる人間の仕事の如何なる一部門に於ても彼の撰擇した業務に従事するとする。然る時はさような一社會はその代りに、その總ての成員に福利を保證することが出来る、その福利は今日中産階級によつて享受されるところのものよりもつと實質的なものである。」「これ生活必需品の生産についてである。」「更にこの社會に屬する活動者の各は、科學・藝術並に必需品の範疇の下に來ないところの個人的必要に捧げることが出来るるところの少くとも一日五時間を自由にすることが出来る。」「即ち總ての人が十分に食へることの出来る社會に於ては、我々が今日贅澤品であると考へるところの必要が一層鋭く感じられる。而して總ての人は互に似ないが故に（趣味並に必要の多様は人類進歩の主たる保證である）、その欲求が或特定な方向に於て普通人を越へるところの男女が常に居るであらうしまた居るべきことが常に望ましい而して人々は、一日の半を彼の藝術的又は科學的必要又は彼の趣味の充足に用ふるであらう。動力並に總ての種類の道具を供給されて居る大きな研究所、巨大な工業的實驗所が總ての探究者に開かれて居る。また、或生活の便宜品を得んと欲する者は、その製造者の團體に加はり働くことによつてこれを獲得するに至ると考へられて居る。こゝに各個人の個性の自由な發揮が十分に尊重せられ、これが爲めに必要な設備並に諸の便宜品の自由になる獲得が考慮されて居るのである。

更に總ての働きが快よきものとなされ得る爲めの設備が、必要である。即ち工場も科學的な實驗所と同様に健康的な快よいものとなされ得る。婦人の家庭に於ける働きについても、總ての種類の機械が取り入れられ動力の

配分によつて容易に動かされる。かゝる機械は今日に於ては使用の範圍の小なると資本家生産の暴利によつて高價なものとなつて居るのである。また家内労働よりの解散は、今日各家庭に於て別々になされて居ることを或程度まで協同にすると云ふことによつてなされる。かくて婦人の生活を人間的に高めることが出来る。而も多量を共同的に調理したる食料の調味を更に各家庭に於てその趣味に従ふてなすと云ふが如く、各家庭の個性的趣味を重んじ得るのである。

かくの如く、彼は、自治體を構成して居る各人の個性的相違を重んずると共にまたこれを構成して居る各家族の個性的相違を重んずるのである。

この自治體の經濟的構成について次に注意すべきことは、市民社會經濟に於て重んぜられるところの分業なるものと反對に「労働の合成」が重んぜられることである。彼はこのことを、「結局生産を如何にすべきか」を明にしたところの『田園・工場及び仕事場、又は農業と結ばれたる工業並に手工の仕事と結ばれたる頭腦の仕事』¹⁾に於て詳論して居る。そこに次の如くに述べて居る。

アダム・スミスが諸國民の富の性質と原因との研究をはじめた有名な一章を記憶してゐないものはなからう。その後の經濟史は、云はゞ、その事實の注釋である。「分業」とはその合言葉であつた。そして職分の分割及び再分割—永久的再分割—は、われ／＼人類を殆んど昔の印度に於いてのやうな、確乎として樹立された階級制度に分割するところまで進められた。それは先づ、生産者と消費者とに即ち一方には殆んど消費することなき生産者と他方には殆んど生産することなき消費者とに大別される。更に前者は筋肉労働者と智的労働者に分たれまた、

1) „Fields, Factories and Workshops or, industry combined with agriculture and brain work with manual work”

農業勞働者と工業勞働者とに分たれる。何者についてまた限りなき再分割がなされる。更に進んで全人類が國民的分業に分割されることまでが必要とされるに至つた。而も今日各國がその生産物の爲めの市場を他國に獲得せんとすることが、戦争と軍備の重要な原因を爲す。然るに近代的生产が個人に要求する仕事が愈々單純化するに従ひ、各人がその仕事を轉換して全能力を發揮しようとする要求が著しくなりまたそれが生産力そのもの爲めにも必要となる。また各々の國民は嗜好と性癖、欲望と資源、そして能力と發明力の包括的な總計であつて、諸國民も亦専門化されることを拒む。かくて分業とかへつて反對の傾向が、次第に顯著となりつゝある。その第一は工業の國民的分散である。即ち到るところの工業の同様な分散が擴がつて行き、新しい諸國民が絶えず世界市場のために製造する國民の列に加はつて行く。それ等の新來者達は、それ自身の領域に於て主要工業を發達させるに つとめもし、また成功もし、かくてその技術の上に於ける先進諸國民によつての搾取から解放される。第二に大工業國民の間では、小借地、國內植民、農業教育、及び協國勞働の手段によつて現存の粗放農業の方法を改革するか、または各種部門の集約農法を採用することによつて一層集約的農業生産力をその國內に於て發展せしめることの傾向と必要が益々増大しつゝある。第三に、集中的な大會社と並んで無數に多様な小企業の發達が何等減退の徴候を示めさない。却つて電動力の分配によつてこれに新しい刺激を與へる。第四に、廣汎な科學上の教訓と手仕事の健全なる智識とを結合するやうな教育の必要が、今や一般に認められてゐる。

かくて人生を全體として考察するならば、今日は正に *Integration of Labour* 勞働の合成が主張さるべきであることが發見される。「われ／＼は社會の理想—即ち社會が既にそれに向つて進みつゝあるところの状態—は合

成され結合された労働の社會であると云ふことを主張する。その社會に於ては、各々の個人が手工的且つ智的な仕事の生産者であり、各々の健全なる肉體を有する者は働き手であり、そして各々の働き手は田園に於ても工場に於ても働く、そこでは自然富源の一定の多様性を處理するに十分である大きさの個人の各集團が、それ自身の農業的並に工業的生産の大部分を生産し自ら消費する。¹⁾」

新經濟學についての彼の論は、労働の合成論を以て終つて居る。²⁾ 彼はこゝに新な經濟學の道を開かんとしたのであつて、その終りに當り「今や我々は、人間の必要並にその充足手段の研究に存する新な路を開くに止むる」と述べて居る。³⁾

こゝに彼が共同體的立場に立つて、新な經濟學の課題を提出したことは、その功獻である。而も彼はこの課題を眞に共同體的に解くことは出来なかつた。而してその根本原因は他の場合に於けると同様に國民共同體の考を缺如せし點に存するのである。即ち村落共同體並に都市共同體を越へることの出来なかつた彼の共同體的體驗は、國家の專制的權力によつてこれ等共同體が個々人にまで破壊されたと考へた時、その根底に成立しつゝあつた國民共同體なるものを見ることを妨げたのである。故に彼はこの個々人より出發しこの個々人の自由合意による集合體としての自治體の立場に止まるより外なかつたのである。こゝに彼の共同體的經濟學の立場は、個人主義化されざるを得なかつた。このことは彼の次の語に於てよく現れて居る。即ち「社會並にその政治的構成を、正統的諸學派とは異なる立場より見るることによつて——何となれば我々は國家より個人に下りて行くことによつてはじめる代りに個人より出發して自由社會 free society に到達するが故に——我々は經濟的諸問題に於て同じ方法を追

1) Ibid p. p 22-23.

2) 労働の合成の問題は、『田園、工場、仕事場』の全體に於て詳論されて居る。

3) C. of B. p. 294.

ふ。¹⁾と述べて居る。即ちそれは個々人より出發してその集合的社會に至るものとして、原子論的立場に立つものとなるのである。かくてまた彼に於ては「我々は諸個人の必要 needs of individual 並にそれを彼等がそれによつて充たす手段を研究する」²⁾こととなるのである。

然るに國民共同體的立場に立てる經濟學に於ては、人々は本質的に國民共同體を構成して居るものとして把握されるのであつて、そこに於て研究さるべき必要はこの國民共同體の必要であり、これを充すべき手段は、國民共同體がこれが爲めに用ひ得る手段である。而してその國民共同體の最小の勞費を以て國民共同體の必要を充す爲めの研究がなされなければならぬのである。

而もこの國民共同體は、ルソオの共同體に於けるが如く個々人の社會契約によつて構成されて居るものでなく、共同體の重層性によりその中に含まれて居る農村的並に都市的な諸多の共同體が、國民共同體全體の生産的並に消費的機構を構成するのである。故にこれ等小共同體についてのクロボトキン經濟論は、國民共同體經濟學に於て止揚せられ得るのである。

六

以上私は、共同體思想の發展について考察したのであるが、既にルソオは十八世紀のフランスに於て經濟的階級社會と專制國家とを否定して共同體を實現せんとし、共同體的立場に立つ人間觀、歴史觀、並に共同體の實現論を打立てた。³⁾然しながら、家庭生活⁴⁾の外には具體的な共同體の體驗を缺如して居たルソオに於てはその共同體の觀念は當時勃興しつゝあつた個人主義社會の影響を受けて社會化¹⁾されざるを得なかつた。然るにロシヤに生れ

1) 2) Ibid. p. 236.

3) 拙稿、『民約論に於ける共同體思想』本誌第四十五卷第五號並に『共同體の人間學的考察』第四十六卷第一號参照

4) 『民約論に於ける共同體思想』本誌第四十五卷第五號第三十四頁以下参照

ロシアに於ける基礎事實としてのミールなる村落、共同体、を具體的に體驗し更に十九世紀に於てはじめて十分な發展を果げた原始共同体研究を攝取したクロボトキンに至り、共同体思想は著しく發展した。彼はその人間觀に於て共同感情を以て人間の根本的性格となし、この共同感情に基く共同體的存在を以て人間の本質的な在り方となし人間相互の本質的な關係を相互扶助に於て見、またその歴史觀に於ては人間歴史の發展を共同體の發展に於てみた。この上に更に資本主義社會の共同體的變革論と共同體的經濟學を打立てんとした。かくの如き統一的な體系が共同體的立場より打立てられたことは、共同体思想の大なる進歩である。而もこの彼の共同体思想にもまた顯著な限界があつた。即ちロシアに生れて村落、共同体、を深く體驗したが、これに對立するツア一の專制的國家、權力の支配に惱み、若くしてロシアを亡命し一生の大部分を西歐社會に送らざるを得なかつた彼にとつては、國家なるものは單に人間生活の敵として考へられたのであつて、それは本來の共同體を破壊してこれを個人に分解するものであつた。而してかく分解された個人主義社會に於ける相互鬭争の生活を相互扶助の生活に高めるところのものは、個人主義社會より必然に發生し來るところの組合主義の原理によつて嘗ての村落的並に都市的共同體を回復したところの地方自治體並にその自由聯合であつた。かくて嘗ての共同體は社會化されたと共にこれ等農村的並に都市的單位の共同體をその中に擧揚するところのより大なる共同體なるものは考へられなかつたのである。こゝにクロボトキンの共同体思想に於けるロシア的、並に西歐社會的限界が見られる。

共同體なるものは外延的に自己を擴大して行くのであるがこのより大なる共同體の内にこれを地盤としてより小なる諸共同體が自己を保持し愈々共同體として完成して行くものであると云ふ思想は、彼の共同體發展の思想

に於て見られ得る特に重要なものであるが、彼はこの思想を農村的並は都市的共同體を越へて徹底することが出来なかつた。これ共同體思想を農村的並に都市的共同體を越へて進めると云ふことは、これ等のものをその中に擧揚するところのより大なる共同體としての國民共同體の概念に高まることによつてなし得るのであるが、この國民共同體の體驗を缺如せる者にとつてはこのことは不可能であつた。

かくて共同體的思想を更に徹底せしめると云ふことは、國民共同體の體驗を具體的に有する者に於てなされなければならぬ。而もこのことは古くより國民共同體をその國民史の一貫せる基礎的事實となすところの日本國民に於てはじめて可能である。¹⁾

總て共同體思想なるものは共同體の具體的體驗の上のみ確立し得るものであつて、家族共同體の體驗の上に打立てられたルソオの共同體思想より、村落共同體の體驗の上に打立てられたるクロボトキンの共同體思想に進んだ我々は、今やかくて國民共同體の具體的體驗の上に打立てられたるところの共同體思想にまで進まなければならぬ。

1) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第三二頁參照